

ヤスパース研究

—ヤスパース哲学におけるキェルケゴール思想からの影響—

文学研究科哲学専攻博士後期課程

4110150003 中村元紀

本論文の目的は、主としてヤスパース研究を視座に置きつつ、また補足として、キェルケゴール思想における内在的なテキスト理解、およびキェルケゴール研究の視点をも踏まえながら、ヤスパース哲学におけるキェルケゴール思想からの影響について考察を試みるものである。

哲学史上において、キェルケゴールは、一般に実存概念の祖として知られており、多くの哲学者がその実存思想の影響を受けている。ヤスパースも、その実存思想に影響を受けた人物の一人として挙げることができる。なぜなら、ヤスパースが記した小論「私の『哲学』へのあとがき」を読み進めていくと、「私は、キェルケゴールの実存という「概念」を自分のものにした」、というヤスパースの叙述を見て取ることができるからである。

しかし同じ文章の中で、ヤスパースは、「私はキェルケゴールの信奉者にはならなかった」と述べたうえで、「それでもキェルケゴールの誠実さには驚くべきものがある」という趣旨の発言をする。これらヤスパースの発言は、ヤスパースが自らの実存概念（ヤスパース哲学の用語で言えば、実存の「しるし」）を、キェルケゴールに大きく依拠しながら構築しつつも、彼の思想に全面的に同意していたわけではなかった、ということを示唆するものである。またこれらの発言から、ヤスパースがキェルケゴールを高く評価し、受容したものとして、キェルケゴールの「誠実さ」を挙げることができる。

こうしたヤスパースの発言から、ヤスパース研究者林田新二やキェルケゴール研究者濱田侑子は、ヤスパースがキェルケゴール思想から影響を受け、受容したものとしては、「誠実さ」が挙げられるのみである、と結論づける。

彼らがこうした結論に至るのも無理もないことである。なぜなら、ヤスパースが自らの実存哲学に関する言説や用語について叙述する際、「この言説や用語は、キェルケゴール思想から着想を得たものである」、と逐一明言してはいないからである。またもう一つの理由として、ヤスパース研究者 W.シュナイダースが語る通り、カントやウーバー、キェルケゴールやニーチェが、ヤスパースの思索に影響を与えた唯一の哲学者たちではない、ということも挙げることができる。つまり、ヤスパース哲学における言説や用語は、キェルケゴール思想に限定されるものではなく、むしろその他様々な哲学者たちの影響によるものであって、その要因の方が大きいのではなかろうか、ということである。そのように考えれば、ヤスパースがキェルケゴール思想から影響を受け、受容したものとしては「誠実さ」が挙げられるのみである、という林田新二および濱田侑子の評価は、一定の正当性を有するものである、と行うことができよう。

しかしながら、そうした評価は、必ずしも正しいものとは言えぬものである。なぜなら、キェルケゴール思想における内在的なテキスト理解を踏まえたうえで、ヤスパースの著作を読み進めていくと、そこには、キェルケゴールの思想内容そのものに影響を受けたと思われる言説や用語が多く記されていることが分かるからである。

またさらに『世界観の心理学』を読み進めていくと、そこにはヤスパースによるキェルケゴールについての言及や解釈が多くあることが分かり、また、そうしたヤスパースのキェルケゴール思想理解が、のちの『哲学』の中で、実存に関する言説や用語の形成・構築に影響を与えていたことも分かるのである。

『世界観の心理学』および『哲学』の相関関係について言えば、次のヤスパース研究者鈴木三郎の指摘を挙げることができる。その指摘とは、『世界観の心理学』という書名を冠してはいるが、その著作においても、のちの『哲学』の中で記される「実存開明」に関する哲学的な考察を試みており、またこうした点から、『世界観の心理学』は、のちの『哲学』への予備的著作であると言える、というものである。

また、ヤスパースやキェルケゴール等の実存主義哲学について研究する A.ヒューグリの指摘によれば、ヤスパースは、キェルケゴールの著作の中に登場する用語を忠実に受容しており、またそれが、ヤスパースの著作である『世界観の心理学』や『哲学』に影響を与えるものとなっている、としている。

こうした彼らの指摘から、ヤスパースの実存に関する言説や用語が、キェルケゴール思想と密接な連関性を伴う形で形成され、構築されたものであった、と考えることができ、またこうしたことから、ヤスパース哲学におけるキェルケゴール思想からの影響は、大いなるものがある、と考えることができる。

しかし、そうした指摘にもかかわらず、鈴木三郎ならびに A.ヒューグリは、ヤスパース哲学におけるキェルケゴール思想からの影響に関する具体的な考察を試みようとしてはいない。

そこで本論文では、目次で示した各章の順序に沿って、特にヤスパースの著作である『世界観の心理学』ならびに『哲学』を主な典拠とし、その他ヤスパースがキェルケゴールについて主に論じた著作や小論および遺稿等を参照しつつ、ヤスパース哲学におけるキェルケゴール思想からの影響についての考察を試みることにした。

しかし、ヤスパース哲学におけるキェルケゴール思想からの影響についての考察を試みるとは言っても、それは単にヤスパース哲学におけるキェルケゴール思想からの受容的側面を探究するものではない。なぜならヤスパースは、安直な仕方で、キェルケゴール思想をそのまま受容し、ただ模倣したわけではないからである。むしろヤスパースは、真にキェルケゴールの著作と向き合いつつ、またそれに対して自ら態度をとることを通じて、実存に関する思索を独自に展開しようと試みたのである。そこに、ヤスパース哲学における独自性が表れている、とすることができる。そのため本論文では、ヤスパースがキェルケゴール思想から受容しなかった側面に関しても、考察を試みるものとする。

以上のことを踏まえたうえで、本論文では、各章の順序に基づいて考察を行った。その内容は、以下の通りである。

本論文第1章では、ヤスパースの語る主観性－客観性という両極性が、キェルケゴール思想における「総合」・「自己」とどのような連関性を有していたのかについて考察を行った。『世界観の心理学』において、ヤスパースは、個－普遍という両極性の間に立たされるのが、人間の基本状況である、と述べていた。その基本状況において、人間は、自ら個であることを放棄して、普遍へと従属しようとするか、もしくは、それとは反対に、自ら個であろうとして普遍に反抗しようとする。しかし、ヤスパースの主張としては、個と

普遍の一致を目指して、個ならびに普遍の両方に関わろうとすることこそが、真の自己である、としている。そうした個と普遍の一致を目指す自己のあり方は、キェルケゴールのいう〈総合としての人間存在〉であろうとする〈関係としての自己〉に由来するものであった。また、こうしたキェルケゴール理解から、ヤスパースは、のちの『哲学』において、主観－客観という両極性を保とうとする「実存」のあり方を案出していた、ということが明らかとなった。

本論文第2章では、ヤスパース哲学の中で語られている「内的行為」が、キェルケゴールの反省概念である「自分自身に関わること」とどのような連関性を有していたのかについて考察を行った。ヤスパースのいう内的行為は、「自分はいかにあるべきなのか」という問いのもとで主体的反省を行う、キェルケゴールの「自分自身に関わること」に由来するものであった。また、この内的行為は、キェルケゴールのギーレイエ日記や著作の中にも登場する言葉であった。こうしたことから、その用語法に忠実にならう仕方で、ヤスパースは、自らの用語として内的行為を用いていたことが明らかとなった。さらに、『哲学』の中で、ヤスパースは、実際に内的行為を遂行する存在様態を実存としてとりあげているが、それは、キェルケゴール思想の中で語られている、いわゆる〈関係としての自己〉および〈他者との関係〉に由来するものであった、ということも明らかとなった。そうした実際に内的行為を遂行する実存という用語設定は、のちのヤスパースの著作である『実存哲学』や『啓示に面しての哲学的信仰』にも影響を与えるものでもあった。

本論文第3章では、ヤスパース哲学における「孤独」－「交わり」関係が、キェルケゴール思想における「閉鎖性」－「自由」関係とどのような連関性を有しているのかについて考察を行った。ヤスパースは、『世界観の心理学』の中で、キェルケゴールの「閉鎖性」および「デモーニッシュなもの」を学び取ったうえで、のちの『哲学』において、その考え方を自らの思索のうちに取り込んでいた。ヤスパースは、キェルケゴールの『不安の概念』の中で語られている「閉鎖性」を、他者との交わりの有無を基準として、それぞれ〈相対的閉鎖性〉・〈絶対的閉鎖性〉の二種類に区別する。〈相対的閉鎖性〉は、自分の内面性を通して、主体的反省を行いつつ、他者との交わりを求めていくことで、自らあるべき〈この私〉をあらわにしようとする。こうした〈相対的閉鎖性〉のあり方を、キェルケゴールの言葉で言えば「自由」となる、ヤスパースは称する。そして、この〈相対的閉鎖性〉のあり方は、のちの『哲学』において、他者との交わりを通して「実存的にあらわになること」として表現されるものとなった。しかし、〈相対的閉鎖性〉に対して〈絶対的閉鎖性〉の方は、自分の内面性にも他者に対しても関わりを持つとしないものである。ヤスパースの指摘によれば、そうした〈絶対的閉鎖性〉のあり方を、キェルケゴールは「非自由」と称する、としている。そして、この〈絶対的閉鎖性〉のあり方は、他者との交わりに対して不安を抱く「デモーニッシュなもの」のあり方でもある。この〈絶対的閉鎖性〉および「デモーニッシュなもの」は、のちの『哲学』において、「かくある存在」としての「現存在」、ならびに交わりの欠乏である「孤独」と「沈黙」を表すものとなった。またヤスパースは、『世界観の心理学』の中で、キェルケゴールのデモーニッシュ論から「あらわになること」－「閉じこもること」の両極性を学び取ったうえで、その両極性を、『哲学』では、「実存的にあらわになること」－「かくある存在であろうとする現存在」の両極性として、また『理性と実存』では、「理性」－「実存」の両極性とし

て表現していた、ということも明らかとなった。またさらに言えば、『世界観の心理学』の中で描写されていたキェルケゴール絶望論が、のちの『哲学』の中で、超越者に対する「帰依」－「反抗」の関係として表現されることにもなった。

本論文第4章では、キェルケゴール思想理解に基づくヤスパースの例外者論について考察を行った。本論文第1章から第3章にかけては、ヤスパースがキェルケゴール思想を受容することで生じた、ヤスパース哲学とキェルケゴール思想における類似性について主にとりあげるものであった。しかし、第4章では、それまでとは打って変わって、ヤスパースがキェルケゴール思想から受容しなかったものについて論じるものである。そこでは、ヤスパース哲学とキェルケゴール思想における相違性、ならびに、ヤスパース哲学における独自性が明らかなものとなった。ヤスパース哲学とキェルケゴール思想における相違性とは、キェルケゴールが、他者との交わりを拒絶しつつ、一人孤独の中でキリストのまねびであろうとする〈宗教性B〉を探求する〈キリスト教的実存〉であるのに対して、ヤスパースが、他者との交わりを通して、互いに哲学的真理を探求する〈哲学的実存〉を意味する、というものであった。ヤスパースにとって、キェルケゴールの求める〈宗教性B〉は、自分固有の真理に固執するものであり、またその真理を他者に強要したり、もしくはそれに応じない者を排斥したりしようとする「狂信的真理のパトス」なるものとして映った。それゆえに、ヤスパースは、他者との交わりを通じた実存概念の構築を試みるのである。またそのようにして、他者との交わりを断絶することなく、むしろ、自らの「理性」に基づいて、他者との交わりを不断に求めていくことで、互いに実存であろうとするあり方、すなわち〈理性的実存〉こそが、ヤスパース哲学の独自性であった。

以上が、これまでの章の中で行ってきた考察の内容である。本論文における考察によって明らかになったものを、以下三点にまとめることにする。

まず一点目として、キェルケゴールやヤスパースについて研究するA.ヒューグリやキェルケゴール研究者河上正秀が指摘する通り、ヤスパースは、キェルケゴール思想における実存概念を、キェルケゴールの用語法にならうような仕方で、忠実に受容し、またそれに基づいて自ら実存哲学の構築を行っていたことを挙げることができる。それは、本論文第1章の中で行った、ヤスパースの主観－客観の両極性における「実存」、およびキェルケゴール思想における「総合」・「自己」との連関性についての考察、ならびに第2章の中で行った、ヤスパースの内的行為とキェルケゴールの反省概念との連関性についての考察を見れば、明らかであろう。

次いで二点目として、ヤスパースは、キェルケゴール思想から、他者に対する「開放性」ならびに他者との「交わり」の重要性を学び取っていた、ということも挙げることができる。それは、本論文第3章の中で論じた通り、キェルケゴールの『不安の概念』における「自由は、常に交わりを行っている状態である」という文や、キェルケゴールの『あれか－これか』における「誰も彼もの内にある開放性、率直さ、絶対的な誠実性、これは愛の生命原理である」という文を引き合いに出しつつ、ヤスパースが、他者に対する開放性、ならびに他者との交わりにおける重要性を説いていることから明らかである。ヤスパース哲学の独自性である、他者との交わりを通して、自他ともに実存であろうとする〈理性的実存〉のあり方は、上述したキェルケゴールの文に由来するものだったのである。また、キェルケゴールの『あれか－これか』や『人生行路の諸段階』において登場する、

仮名著作者判事ヴィルヘルムの発言に注目すると、他者に対する開放性や他者との交わりの重要性を説く姿勢が見受けられる。その姿勢とは、自ら見初めた伴侶と結婚しようとする「肯定的決意」に基づいて、その伴侶に対して心を開きつつ、また「誠実性」を持って接することで、自他ともに時間的なもののうちでありながらも、永遠なものである神とのつながりを見出すことができる、というものである。このヴィルヘルムの姿勢は、他者との交わりを通して、自他ともに実存であろうとする、ヤスパースの〈理性的実存〉のあり方に匹敵するものである、とすることができよう。つまり、考えられることとして、ヤスパースは、このケルケゴールの仮名著作者判事ヴィルヘルムの姿に共感を抱き、それを自分の実人生と重ね合わせる仕方で、他者との交わりを通して、自他ともに実存であろうとする〈理性的実存〉の構築を試みていたのではないかと、いうことを挙げるのであり得るのである。これについては、今後より深い考察を行っていく必要がある、と言えよう。

そして三点目として、ケルケゴールの「あらわになること」－「閉じこもること」の両極性から、ヤスパースは「交わり」－「孤独」の両極性を学び取っている、ということも挙げることができる。ケルケゴール研究者中里巧のいう通り、人間は、神やデモーニッシュなもののように、精神として不断に自己意識活動を行うことができないが、それでも、ケルケゴールは、彼の読者に対して、理想的人間であろうとして、不断に自己意識活動を行うことを要求する。そのように人間は、神にもデモーニッシュなものにもなりきることができないにもかかわらず、その両極性の間を行ったり来たりしながら、あるべき〈この私〉を求め続けなくてはならないのである。そうしたケルケゴールの「あらわになること」－「閉じこもること」の両極性を、ヤスパースは、「交わり」－「孤独」の両極性として理解したものと考えることができる。なぜなら、『哲学』や『理性と実存』を読むと、次の通りに、交わり－孤独の両極性が表現されているからである。すなわち、『哲学』では、他者との交わりを通して、自ら「実存的にあらわになること」、およびそうした交わりに反して独りよがりの生き方をしようとする「かくある存在であろうとする現存在」の両極性が表現されており、また『理性と実存』では、他者との交わりへと衝迫する「理性」、および自分自身の深みに迫ろうとして孤独になろうとする「実存」の両極性が表現されているのである。このように人間は、自分の心を開けっぴろげにして、他者との交わりを徹底的に行おうとすることも、また逆に、自分の心を徹底的に閉ざし、他者との交わりを断絶して、一人孤独のままに居続けようとすることもできないのである。人間ができることとは、そうした交わり－孤独という両極性の間を行きつ戻りつしながら、その中であるべき〈この私〉を探求することのみなのである。

以上の三点は、どれもヤスパース哲学の根幹をなすものであると言えるが、そこには必ずと言っていいほど、ケルケゴール思想との連関性が密なものとして登場する。それは、ヤスパースがケルケゴール思想を単にそのまま受容したのではなく、むしろ、ケルケゴールの著作と真に向き合いつつ、その中で実存に関する思索を独自に展開しようとした結果によるものであった、ということが言えよう。

こうしたことから、ヤスパースがケルケゴール思想から受けた影響は、寡少なものでなく、むしろ壮大なものであった、と結論づけることができるだろう。

従来の研究では、ケルケゴール研究者濱田恂子が指摘する通り、ヤスパースの著作においては、ケルケゴールに関する言及がたびたび見受けられるものの、そうしたケル

ケゴールに関する自身の考えを、ヤスパースは一冊の書物にまとめることをしなかった、ということが挙げられている。こうした点から、ヤスパース哲学とケルケゴール思想との関連性はそれほど高くはない、と一般的にみなされてはいた。

しかし、ヤスパースは、ケルケゴールに関する論文を多く記さなかったとはいえ、本論文において論じてきた通り、ヤスパースは、『世界観の心理学』においてケルケゴール思想を学び取ったうえで、のちの『哲学』や『理性と実存』等の著作の中で、ケルケゴール思想を暗に用いる仕方で、自らの思索を展開していったのである。その証拠として、先ほどまとめた三点の内容を挙げるができるだろう。

また、『偉大なる哲学者たち—遺稿 1』を編集したヤスパース研究者 H.ザーナーは、遺稿の中で、ヤスパースの思索の発展形成において重要な役割を果たしている草稿に関してはなるべく多く収録するようにした、と述べたうえで、その一つとして、ケルケゴールに関する草稿をとりあげている。その草稿は、21枚のファイルに分けられたものであり、その草稿は、『偉大なる哲学者たち—遺稿 2』に収録されているが、その量は100ページを越すほどの膨大なものである。

このように、ヤスパースは、ケルケゴールに関する論文を多く記さなかったが、その分草稿としては多くのものが残されていた。こうしたことから、たしかにヤスパースは、ケルケゴールに関する自らの考えを一冊の書物にまとめることができなかつたのかもしれないが、他方で、ケルケゴール思想に果敢に取り組もうとしていた姿勢が、先ほどとりあげた草稿の量から窺い知ることができるだろう。

ケルケゴール研究者 H.シュルツは、ヤスパースを、ケルケゴール思想を受容しながらも、単なる受容にとどまらず、そこから新たに自らの思索を展開したとする「生産的受容かつ受容的生产」を行った人物として、とりあげている。そうした H.シュルツの主張こそ、ヤスパース哲学におけるケルケゴール思想からの影響に関する正当な評価である、と私は考える。